

# 修学旅行詠

福島県立安積高等学校

平成二十六年十月二十一(火)～二十四(金)

10 / 31 版

## 西行

うちつけに又こむ秋のこよひまで  
月ゆゑ惜しくなる命かな

ゆくへなく月に心のすみ／＼て  
果はいかにかならむとすらむ

月をこそながめば心うかれ出でめ  
やみなる空にただよふやなぞ

① 熊谷明彦

② 宗方 浩 (学年副主任)

③ 鈴木宏治 ④ 大木哲男

⑤ 益子 章 ⑥ 須田昌義

⑦ 阿部祥子

⑧ 菅野多美子 (学年主任)

鳴原恵美、岡村敏幸 (副担任)

伊藤勝宏 (教頭・団長)

【十月二十一（火）旅立ちの日ゝ奈良】

七一〇年平城京遷都以来、一千三百四年の歴史を持つ奈良へ旅立つ朝、  
饑<sup>むまのはなむけ</sup> 別 として詠める 校長 久保田範夫

○ 大和路を歩む安積の若人は 百三十年の歴史<sup>とき</sup>を背負ひて（久）

【十月二十二（水）ゝクラス別コース】

【十月二十三（木）／京都班別自主研修・神戸】

神戸ディナークルーズの甲板にて詠める

四組 K・M

修学旅行という特別な時間の楽しさに一旦現実を忘れてしまった。

この詩を思いついた日は新月、新月は輝いていないのだから当然水面には映らない。

しかし先人は、曇りの多い中秋の名月の宵に、その雲の後ろにあるであろう、美しい月を想像して楽しんだと聞く。私もそれに倣い、恐らくその水面に浮かぶであろう「夢の如きこよなき月（夢の如き時間つまり修学旅行）」を楽しむのだ。

□ 現<sup>うつつ</sup>抜け

水面<sup>みなも</sup>に映える

見えぬ月

△ 花はさかりに、月はくまなきをのみ、見るものかは。雨にむかひて月を恋ひ、たれこめて春のゆくへ知らぬも、なほ、あはれに情けふかし。

…すべて、月花をば、さのみ目にてみるものかは。春は家を立ちきらでも、月の夜は閏ねやのうちながらも、思へるこそ、いとたのもしう、をかしけれ。…（徒然草・第百三十七段）

△ 百人一首

57 番 「めぐりあひて見しやそれともわかぬまに雲隠れにし夜半の月かな」（紫式部）

79 番 「秋風にたなびく雲の絶え間よりもれ出づる月の影のさやけさ」（左京大夫顕輔）

36 番 「夏の夜はまだ宵ながら明けぬるを雲のいずこに月宿るらむ」（古今集・清原深養父）

△ 見渡せば花も紅葉もなかりけり 浦の苫屋とまやの秋の夕暮れ

藤原定家（新古今集・秋歌上）

【十月二十四（金）京都へ旅の終り】

校長 久保田範夫

○ 陸奥みちのくに帰り来たれる若人は 古都のかをりを漂はす（久）

## □ 百人一首の月詠歌

百人一首の中で月詠歌は次の十一首で、「有明」まで拡大すると、十二首になる。これは、百人一首の歌題の中でも多い部類になる。

(注) 最も多い歌語：「ひと」(二十首、取り札九枚の「ひとなかせ」の札)、

「山」(十四首)、「つき」(十二首)、「風」(十一首) など。

これらの「月詠歌」を選定した定家の意図するところはどの辺にあったのか。月の移りゆきに沿った色々の歌を、しかも古今和歌集から半数以上(六首)を選定していることが分かる。

「見えない月」は、中天あたりを運行していると思われる清原深養父の第36番歌と紫式部の第57番歌に詠まれている。

めぐりあひて見しやそれともわかぬまに 雲がくれにし 夜半よはの月かな

(紫式部 新古今集・雑上、百人一首57番)

夏の夜はまだ宵ながら明けぬるを雲のいづこに月宿ふかやぶるらむ

(清原深養父 古今集・夏歌、百人一首36番)

- 21番 今来むといひしばかりに長月の有明の月を待ち出でつるかな（古今集・素性法師）
- 7番 天の原ふりさけ見れば春日なる三笠の山に出でし月かな（古今集・安倍仲磨）
- 23番 月見ればちちに物こそかなしけれわが身ひとつの秋にはあらねど（古今集・大江千里）
- 86番 嘆けとて月やは物をおもわするかこち顔なる我が涙かな（西行法師）
- 68番 こころにもあらでうき世にながらへば恋しかるべき夜半の月かな（三条院）
- 57番 めぐりあひて見しやそれともわかぬまに雲隠れにし夜半の月かな（紫式部）
- 79番 秋風にたなびく雲の絶え間よりもれ出づる月の影のさやけき（左京大夫顕輔）
- 36番 夏の夜はまだ宵ながら明けぬるを雲のいづこに月宿るらむ（古今集・清原深養父）
- 59番 やすらはで寝なましものを小夜更けてかたぶくまでの月を見しかな赤染衛門
- 81番 ほととぎす鳴きつるかたをながむればただ有明の月ぞ残れる（後徳大寺左大臣）
- 30番 有明のつれなく見えし別れより暁ばかり憂きものはなし（古今集・壬生忠岑）
- 31番 朝ぼらけ有明の月と見るまでに吉野の里に降れる白雪（古今集・坂上是則）

藤原定家は、壬生忠岑の第30番歌を秀歌として褒め称え賞翫していたと言われているが、父親の俊成の言葉「歌人は源氏読みであるべき」との立場から、「源氏物語」と同様、紫式部の歌も重要視していたようだ。選ばれた月詠歌の中にあつて、数少ない「見えない月」を詠んだ歌を紫式部の歌に充てているからだ。

## □ 雲隠れの月

### △ 万葉集における「雲隠れの月詠歌」

万葉集では約百八十首（一説に二二五首）の月詠歌が集録されている。日本人の月を見る態度は、奈良朝以降、自然観賞の習慣が生まれ、照る月を愛でる表現も見られるようになるが、「仲秋の名月」なるものを鑑賞する習慣は、中国唐代に興った慣わしを真似たもので、本邦では孝謙天皇の時代からとされているようだ。

万葉集では、巻第七・雑歌に「月を詠める」題詠として、一〇六九番歌から一〇八六番歌まで十九首が集められているが、八月十五夜の月を詠む歌はない。後撰集あたりから、「八月十五夜」の歌題が見られるようだ。もともと万葉集の中には、「照る月」ばかりでなく、三日月を詠んだ歌、あるいは、次のような歌もある。

まそ鏡照るべき月を白たへの雲か隠せる天つ霧かも（一〇七九番）

霜曇り為すとにかあらむ久方の夜渡る月の見えなくおもへば（一〇八三番）

山の端にいさよふ月を何時とかもわが待ち居らむ夜はふけにつつ（一〇八四番）

いずれの歌も「月は見えないままにかまわない」と言っているのではなく、明らかに月の出を期待している心情であり、それが平安朝になると、月に対する美意識が変わっていく。

△ 平安朝文学における「雲隠れの月見」

中国大陸的「月見」は、明らかに「皎々たる月」を眺めることにある。また、古今和歌集でも「雲隠れの月」を鑑賞するという美学は未だ存在していなかったのではないかと思われる。

(1) 和漢朗詠集に見る漢詩の「皎々たる月」詠歌集(巻上・秋 十五夜付月より)

「三五夜中の新月の色 二千里外の故人の心」(白氏文集)

「十二廻の中に 此夕の好きに 勝りたるは無し 千万里の外に

皆我が家の光を争ふ」(紀 長谷雄)

(2) 古今和歌集における「月」詠歌群

木の間より漏り来る月の影みれば心尽くしの秋はきにけり(一八四番 読み人知らず)  
白雲に羽うちかはし飛ぶ雁の数さへ見ゆる秋の夜の月(一九一番 読み人知らず)

久方の月の桂も秋はなほ紅葉すればや照りまさるらむ(一九四番 忠岑)

秋の夜の月の光し明ければくらぶの山も越えぬべらなり(一九五番 在原元方)



## □ 見えないものを見る美学

紫式部の百人一首歌に見られるように、日本人は、月を詠むのに必ずしも、満月ではなく、三日月などの欠けた状態を趣があると見たり、さらには、見えない月を見ることを月見の一つにするという一種の美学を創り出している。

### (1) 源氏物語における「澄める月」と「見えぬ月」

「澄める月」の代表的描写（「朝顔」巻より、光源氏のことば）

「時々につけて、人の、心を移すめる、花・紅葉の盛りよりも、冬の夜の澄める月に、雪の光あひたる空こそ、あやしう、色なきものの、身にしみて、この世の外のことまで、思ひ流され、おもしろさもあはれさも、残らぬ折なれ。」

一方、「天氣が悪くて月が隠れている、あるいは、月がない頃の出来事は「源氏物語」では、例外的である。」（林田孝和ほか「源氏物語事典」（大和書房）二〇〇二年）ということなので、「見えぬ月」をわざわざ言及している所はないようだ。したがって、なおさら物語の中ほどにさしかかったの「雲隠」の巻は、衝撃的であるのかも知れない。かつ紫式部は、敢えて、文章不用と見たのだらう。こういう作家的工作も天才的。

因みに、「月は、雪や花と並んで親しまれる風物でありながら、眺めるのを忌むという月の俗信があった。」（引用文献：前出）ということであり、「見えない月」とい

うより敢えて「見ない月」ということになる。

なお、「枕草子」での清少納言の月は、「ごく常識的な季節の月が多く採りあげられている」（枕草子研究会編「枕草子大事典」（勉誠出版）平成十三年四月）のとこの。

## （2）鎌倉期の知識人の「見えない物」へのこだわり

悪く言えば、やせ我慢か、あるいは、無い物ねだりをしない諦めの早さか、奥ゆかしさか。しかしながら、定家詠「見渡せば花も紅葉もなかりけり浦の苫屋の秋の夕暮れ」という歌の中に「やせ我慢」「諦めの早さ」などと言えるところがあるのだろうか。定家より少し時代が下がる鎌倉初期の知識人の「月見」の考えを引用する。

### （ア）鴨長明の「無名抄」

「…霧の絶え間より秋山をながむれば、みゆる所はほのかなれどおくゆかしく、いかばかりもみぢわたりておもしろからむと、かぎりなくおしはからるるおもかげは、ほとほとさだかにみむにもすぐれたるべし。…」（出典：冷泉為人「百人一首について」日本人のこころをめぐって―（財）小倉百人一首文化財団 百人一首ゆかりの史跡を尋ねて 平成18年4月27日 於上賀茂神社）

(イ) 吉田兼好の「徒然草」(第百三十七段)

「花はさかりに、月はくまなきをのみ見る物かは。雨に向ひて月を恋ひ、たれ込めて春の行方知らぬも、なほあはれになさけふかし。咲きぬべきほどの梢、散り萎れたる庭などこそ見所おおけれ。…」

望月のくまなきを千里の外まで眺めたるよりも、曉あけ近くなりて待ち出でたるが、いと心ふかう青みたるやうにて、深き山の杉の梢に見えたる、木の間の影、うちしぐれたるむら雲がくれのほど、またなくあはれなり。…すべて、月花をば、さのみ目にてみるものかは。春は家を立ちさらでも、月の夜は閨のうちながらも、思へるこそ、いとたのもしう、をかしけれ。…」

「見えぬ物を見る美学」の典型は、平安期和歌世界の「歌枕」であり、中世の「能」や「狂言」、また、俳句も見方を変えれば、最小限の言葉を使いながら、より多くの「見えぬ世界のイメージ」を鑑賞者にふくらませられるかが、句の良し悪しになると言えるかも知れない。

△ 中国における「月」く主に李白の作品から

秋浦歌 其五（全十七首） 秋浦の歌 其の五

秋浦多白猿 秋浦に白猿多し

超騰若飛雪 超騰すること飛雪の若し

牽引篠上兒 条<sup>えだ</sup>の上の兒<sup>こ</sup>を牽引し

飲弄水中月 飲んで水中の月を弄ぶ

静夜思 静夜思

牀前看月光 牀前 月光を見る （中国の通俗詞華集では「明月」が多い）

疑是地上霜 疑ふらくは是れ地上の霜かと

舉頭望山月 頭を舉げて 山月を望み

低頭思故郷 頭を低れて 故郷を思ふ

關山月 關山の月

明月出天山 明月 天山に出づ

蒼茫雲海間 蒼茫たり 雲海の間く

月下獨酌 其一

花間一壺酒 花間 一壺この酒

獨酌無相親 獨り酌みて 相い親しむもの無し

舉盃邀明月 盃を舉げて明月を邀むかえ

對影成三人 影に對して三人と成るゝ

把酒問月 酒を把つて月に問ふ

青天有月來幾時 青天 月有りて來のかた幾時ぞ

我今停盃一問之 我 今 盃を停めて 一たび之に問はん

但見宵從海上來 但だ見る 宵に海上より來るを

寧知曉向雲間沒 寧んぞ知らん 曉に雲間に向かひて没するを

（人はただ、宵の間に海上から登る月を愛するだけ、

夜明けの残月が雲間に沈むのには、何の興味も起こさない。）

今人不見古時月 今の人は見ず 古時の月

今月曾經照古人 今の月は曾かつ經て古人を照らせり